

「腎機能低下患者への薬の使い方」

富野康日己 編集

福岡大学教授・腎臓内科

齊 藤 喬 雄

一般に薬剤の代謝過程において、腎臓は肝臓とともに重要な排泄経路である。特に腎臓では、糸球体濾過の他に尿細管における再吸収・分泌というメカニズムが排泄を複雑にしており、薬剤によって排泄の実態が異なっていると考えられる。したがって、専門医といえる私達でも、十分理解していない点が少ない。

腎で排泄される薬剤については、腎機能低下とともに血中濃度が異常に上昇し、副作用を引き起こす危険があることや、排泄の過程で主に尿細管・間質系に障害を及ぼす恐れについて考慮しなければならない。最近、このような問題が重視されており、実際の診療において薬剤の投与量を定める場合、常に念頭に置く必要が出てきた。このため、各薬剤ごとに、腎機能と投与量の関係を示した成書もいくつか出版されている。

しかし、これらでは詳細な内容は示されずに、単に投与量を羅列するに終わっていることも多い。また、新しい薬剤についての記載が少なく、使用したい薬剤の情報がしばしば得られない。

今回、富野教授の編集により刊行された「腎機能低下患者への薬の使い方」では、このような問題点を十分に考慮し、保存期および透析期腎不全の治療を行うにあたって、実際の薬剤の使い方を述べている。使用頻度が高い薬剤を中心に、副作用や相互作用などとともに処方例が載せられており、医療現場において、迷うことなく処方用量を定められるという利点を持つ。特に、現場で遭遇する状況を想定してその対処法を説明したワンポイントアドバイスは、極めて有用であろう。使用される場を考慮して小型化したサイズも

好ましい。

一方、なぜこのような投与量にしなければならないのか、腎機能低下時における薬物動態や薬物投与設計について、薬理学の植松岐阜大学名誉教授により詳しく解説がなされている。したがって、本書に記載されていない薬剤を投与する必要がある場合に、投与量を決定する参考となるし、腎機能低下時の薬剤投与法をよく理解し知識をまとめる際にも役に立つ。現場を離れて十分な時間があるときなど、腎臓の役割を認識する上からも好著である。以上のような点から、本書は腎や透析の専門医だけでなく、腎不全患者を扱う医師に広く勧めたい。

● B6変型 頁292 2002 定価
(本体3,800円+税) 送料実費

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)